

## あとがき

---

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団  
調査研究 障害者スポーツ・プロジェクトリーダー  
藤田紀昭

リオ 2016 パラリンピック。資金不足と準備の遅れから開催すら危ぶまれた大会であったが、ふたを開けてみれば、大きな混乱もなく無事終了したように思われる。私にとってはアトランタ 1996 大会から数えて 6 回目のパラリンピック観戦となった。国内でチケットを販売するのは特定の代理店に限られている。その代理店に割り当てられた観戦チケットの範囲内では、自分の旅程に合わせて、みたい競技のチケットを購入するのは至難の業だった。結局、出発前までに購入できたチケットは 3 枚だけ、40 時間近くかけてリオに行き、5 日間の滞在で 3 競技だけの観戦ではかなりもったいない気がしていた。

アトランタ 1996 大会の時は 1 日券が 1000 円程度、入場の際にチケットのチェックをされることもなくほとんどフリーで入れたことを思うとまさに隔世の感がある。幸い現地入りしてからすぐにインターネットでさまざまな競技のチケットを入手することができ、見たかった競技のほとんどを見ることができた。その後、滞在 3 日目くらいに再度チケット販売のサイトをのぞいてみるとほとんどの競技のチケットが売り切れになっており、驚かされた。リオ 2016 パラリンピックは開会してから急激に盛り上がり、競技会場に多くの人が足を運んだものと思われる。

会場が人でいっぱいになったという点では大会は成功したといえるかもしれない。問題はレガシーが残ったか？という点である。懸念するのは急激に熱したものは、急激に冷めるのではないかということである。英国ウースター大学の Mick Donovan 氏は「レガシーは大会前にも、大会中にもそして大会後にもある」と述べている。大会前に多くの人々が障害者スポーツに関心を持ち、それを大会の盛り上がりにつなげる。その意識の変化を大会後も継続させる。このことこそが重要なのであり、パラリンピックが目指すところ、また我が国が向かおうとしている共生社会の実現に結び付くのではないだろうか。

今年度の調査で、北京 2008 パラリンピック、ロンドン 2012 パラリンピックと比べてリオ 2016 パラリンピックはテレビ放送時間が格段に多くなっていることがわかった。しかし、2 年前の本プロジェクトの調査とくらべて障害者スポーツ選手の認知度はさほど変化していないことが明らかになった。テレビ放送が増えたのに認知度は上がっていない。少々乱暴な言い方になるかもしれないが、人々の関心がまだ障害者スポーツやパラリンピックに向いていないということなのかもしれない。しかし、変化の兆しはみられる。今年度インタビューさせていただいた 2 大学では大学のビジョンの中に障害者スポーツ関連事業を位置づけ組織的に展開しようとしていた。これまでにはみられなかった変化である。

東京 2020 大会まで残された時間は 3 年あまり。東京だけでなく、国内の様々な地域で障害者スポーツやパラリンピックに関心が向くような事業を展開し、徐々に人々の関心が高まることを期待したい。そして、パラリンピックのチケットが早くから完売し、会場は満員となり、共生社会実現のメルクマールとなることを祈りたい。その歴史の証人として、エビデンスを積み上げていくことが障害者スポーツ・プロジェクトのミッションだと考えている。これまで同様、今後も皆様のご協力とご支援を賜りたい。